



# 文学のファン タジー

大虎

「文学のファンタジー」

by 大虎

目次

- 1、 プロローグ
- 2、 ハウルの動く城
- 3、 小窓のあいたモナド
- 4、 かきことばの舞台
- 5、 科学的言語と隠喩的言語
- 6、 文学は表現手段のなかでマイノリティーか？
- 7、 呪いをかける魔法と呪いをとく魔法
- 8、 文学のファンタジー
- 9、 もうひとつの魔法：回想
- 10、 エピローグ

本文

## 1、プロローグ

「世界を変えうる勢いを持った熱い小説。ジャンルは君がつくる！」

ある、文学賞のキャッチフレーズだ。

作家になりたかった、平凡で老獪な（ぼくのような）人々は、こうつぶやくだろう。

かつては、店先においてあるレモンでさえ、爆弾となって、人々の心で炸裂するという思いが、広く支持されたことがある。

しかし、いつも通っている図書館へいく道の途中の交番の前にはあってある、指名手配のポスターの中の爆弾犯人と違い、言葉のテロリストたちはかわいそうだ。

決して爆発して人を殺めることのない、言葉の爆弾を投げ続けている。

そんな、現実を知りつつも、自分と書く事（残念ながら描くことや、弾くことや、踊ることや、創ることではない）が長い間の習慣から、わかちがたくなってしまう者が用意するひとつのいいわけがこの小論の出発点だ。

「私は、あなたを追って、あなたの生まれ故郷までやってきた。

何人かの人、まだあなたのことを覚えていた。

彼らは私にこう言った。

「あの人は、死んでしまったけれども、とても偉大な方でしたよ。」

しかし、もはや、多くの人、あなたのことに注意をはらっていないように見える。

私のところまで、あなたの噂が届くまでの時間、そして、噂をたよりに、こうして私があなただの街までやってくるまでの時間。

その長い月日の間に、あなたの存在は、私の中でどんどん大きくなっていったのに、もはやあなたはこの世になく、あなたのことを語る人も数少なくなっている。

いや、注意してみれば、あなたがつくりだした<蒸気>は、この街のいたるところに漂っていることを私は感じる。

もちろん、そこにあなたの名前は記されてはいない。

それを創り出した「ピストン」であるあなたはもうここにはいない。

蒸気機関をうしなつた機関車は、どこへ向かうことができるというんだらう？

有り余るほどの蒸気があっても、ピストンがなければ、それが何になるというんだらう？

しかし、それでも私は、水蒸気のように散らばって消え去ってしまう前に、せめて風になって、枯れ葉を空にむかって舞い上がらせてみよう、と思う。」

(大虎「魔法使いはどこにいる？」)

## 2、ハウルの動く城

いつかの日曜日に、家族そろって、宮崎駿監督の、話題の映画「ハウルの動く城」を観にでかけた。

子供は小学生の1年生と3年生。専業主婦で、最近、ラジオのDJをはじめようとしている妻。そして、サラリーマンをやりながら、趣味でものかきをして公募に投稿をくりかえしているぼく。それぞれが、楽しめる映画だった。あきさせない展開。SF Xでは表現できない視覚のマジック、随所のあらわれるキャラクターの面白さで、

2 時間、子供たちも席をはなれることはなかった。こんなことははじめてだった。

スタジオジブリ製作の宮崎アニメは、日本人にとって、恒例行事の娯楽作品として認知されてきている。

しかし、約 20 年前、アニメージュで「風の谷のナウシカ」が公開されたころから追っかけているファンは、きっと、前回の「千と千尋の神隠し」から、宮崎アニメが、非常に抽象化してきているような印象をもっていると思う。その抽象性を、うすめる(ごまかす?)ためかのごとく、視覚的なおどろきは、以前にまして増加している。が、瞬間的なおどろきがさったあと、残るのはずいぶん抽象されたものだ。

わかりやすいストーリーは消えてしまったのに、なぜ、沢山の人々が宮崎駿の映画を観に行くのだろうか? 子供をふくめた、老若男女が、絵画の印象派の作品を観にいったって、美術館があふれかえる、というようなことが現実に映画館でおきてるのだ!

今回の「ハウルの動く城」は、まだ少し、みなれたストーリーがあちこちにちりばめられ、前作より、少し近しく、楽しいものになっている気がぼくにはした。要するに、観にいったもの、それぞれが、それぞれの感想をもち、それぞれの楽しみ方をするのが、宮崎アニメのよさだ。

そこで、ぼく個人の「ハウルの動く城」から感じたこと。

「ハウルの動く城は、ライブニッツのモナドではないか？」

### 3、小窓のあいたモナド

ライブニッツの著作を研究したわけではない。しかし、彼が人間の心を、モナド(原子)にたとえたということは、高校の倫理の教科書にでてきた知識で知っている。ぼくは、倫理の教科書を想像しながら楽しんで読む性向があった(大学入試共通テストで選択もした! )。

しかし、そのモナドは、均一で、清潔なものではないというあたりまえのことが、今回あらためて意識された。モナドの表面は、さまざまな部屋がつぎはぎになっていて、その部屋には、小窓がついている。部屋の中はがらくたの山だ。もちろん掃除可能な。

このがらくたの風景には、ぼくのような、ある程度年をとってきたものにとっては、ぐっとくるものがある。記憶？思い出？沢山の徒労におわったこと、あるいは思い。無駄でなかったと思っても、他人に結局認められないまま、光をたもちつつ（とりたい）部屋の中にうちすててあるもの。宝石のかけら。映画の中では、すべてが臆病者のつくった、城を守るための過剰な魔よけ、とひとことでかたづけられてしまうのだが・・・。

このモナドは、外の様子を小窓をあけてのぞく、という程度の外とのつながりをもっているのではない。モナドを残し、外にとびでることができるし、なんといっても、違う場所に同時に存在する。モナドは、時と場所により変形する。状況に応じて、様々に形や内装をかえ、様々な通路をもつ。そして、なにかを機に、まったく崩壊してしまうことだってある。板切れひとつ残して。

人間の固定した人格、あるいは、主体、それとも、確固たる人生観、というのがあられるわけではなく、それは（一時的にあるにせよ）大きく強くなった、城を維持するための、作戦にほかならない・・・ということが容赦なく描かれている。

昔、ある予備校の授業で聞いたつぎのような言葉が、今もぼくの頭に残っている。

一般に、アイデンティティの確立が大切とよくいわれるが、『自分はこの人間である』と自分の可能性を限定し、その1本道を完結してしまうことが、アイデンティティの確立だとしたら、そんなことは、はっきりいって、しないほうがましだ。それよりも、もっと多くの役を演じてみる。自分が他者になれるというのは、立派な自己解放である。多くの役を演じることによって、人間としてさらに大きな幅がでてくることだろう・・・。

自己実現という言葉は、とかく、他人にはない固有の自己を実現すること、ととらえられがちである。そんなことは、むずかしく、普通の凡人にはできないことじゃあないか？

でも自己実現が、このような、場面、場面での自己表現としたら、自己実現というのはそう難しいことではない。

つまり、ぼくが、この評論を書いているのは、ぼく自身の自己実現のためであるが、ほかの人には書けないような、すばらしい文章力をもっているから、書くことが自己実現になっているのではない。書く際に、普段と違う自分になれる、ある自分を演出できる、という意味で、自己表現の手段なのである。歌を歌ったり、絵をかいたり、お芝居をしたり、上司の前でベテランの域に近づきつつある自分の勤務能力をしめすように、ぼくは書くことで、書く舞台の上で、普段と違う自分を演じ、表現するのだ。

#### 4. かきことばの舞台

こんな、小難しいことを、映画をみたあとに感じるというのは、一般的ではないだろう。

たぶん、ぼくは、「ハウルの城」を、映画であるにもかかわらず、文学作品に接するように観たのだ。

書き言葉で構成される文学には、きっと、映画や絵や音楽や芝居や話し言葉など、ほかの表現方法にはない、独自の特徴があるのだ。

「言語による情報の伝達と交換を他の方法と比較するために、かきことばの「はなしことば化」、はなしことばの「音楽化、身振り化」というテーマの話をしようと思います。

大きくいえば、はなしことばの特徴は、交換性に優れ伝達性に劣り、かきことばの特徴は、伝達性に優れ交換性に劣るということになります。交換性がかきことばで劣るということは、ゆっくり読まない、ときには何回読んでもわからない文章を思い浮かべれば理

解できるでしょう。伝達性については、「なにを伝達するか」が問題になるのですが、とりあえず「概念」の伝達という点でかきことばが優れているとだけいっておきます。

はなしことばは、言葉そのものだけではなく、言葉の調子、リズム、高低、強弱や、身振り、表情、タイミングなども大きな役割をもっています。また言葉のもつイメージ（絵画性）もよく利用されます。とはいっても、はなしことばがいくら音楽化、身振り化、絵画化しても、音楽、ダンスや絵画が独自にもつ表現の豊かさにはかきことばが及ばないかもしれませんが。

例えば、「やあ」という一言が、状況次第では I love you よりも強い愛情表現になることもあり得るのです。「あっ」といって指を空にむければそれだけで、のんびりと二人で空を眺めているとき飛行機雲が見えたとか、突然 UFO が目の前を通ったとか、いちいち説明する必要はありません。毎朝のきまった「おはようございます」の一言も、お互いの間に、なんらかの次元の連帯もしくは断絶の空気を形成することができます。生産性どころか、事実の伝達性もない状況においてさえ、はなしことばは、人と人をつないだり壊したりする作用をもっています。

一方、かきことばは、確かに世論という人間関係の形成・破壊能力はありますし、文字の白黒のコントラストは絵画的効果ももちますが、一般に交換性は、紙や鉛筆、読むという行為に制限されてしまいます。事実の伝達ははなしことばでもよくできるので、事実の記録、「概念」の伝達がかきことばの特徴となります。次の章からは、かきことばを中心とする言語の伝達性についてさらに見ていこうと思います。最近の傾向として、かきことばの「はなしことば化」、はなしことばの「音楽化、身振り化」が進んでいる印象が僕にはありますが、みなさんはどう感じているのでしょうか？」

（大虎「言語の可能性について」）



## 5 科学的言語と隠喩的言語

もう少し、文学という表現に用いられる、書き言葉という手段のもつ、他にはない独自性について考えてみよう。

本屋での膨大な本の数、新刊の数をみると、途方にくれるのはぼくだけではあるまい。さらに、読者としてだけではなく、作者としてこの世界で名をだそうという野望をもつ（ぼくのような）人にとっては、なんか雲をつかむような話になる。

ぼく個人は、もう少し狭いが専門的な、科学論文の世界の経験はすでにある。星の数ほどの雑誌、論文。とはいえ、有名な *Nature*, *Science* にのるような論文は、よんでみれば、おおよそそれなりの価値はあると思う。より、基本的なことの発見。本質的なこと。小学校や中学校の教科書にのるような、あるいは書き換えるような発見。そういう仕事が、有名な科学雑誌にのるという、おおよその共通感覚はある。もちろん、そんな大きな発見ではなくても、ぼくらは報告として、科学論文をかく。それが、博士号をとるためとか、高い職を得るための業績づくりとしてとか、動機はおいておこう。それでも、誰かが引用してくれればちょっと嬉しい気持ちになる。

じゃあ、文学は？

ベストセラーになる本が本質的な話を書いているというわけではない。本質的な人間な感情に訴えている？これもちがう。文学に本質論うんぬんはナンセンスだ？誰も一般の人がよまない文芸雑誌にのるような小説が本質論？そうだろうか？人文社会の専門雑誌にのるのが本質的？あやしい。少なくとも、科学論文の世界では、一番本質的といわれる *Nature*, *Science* は、売上げも他雑誌にくらべて、断然高いのだ。

文学と科学を比較して、何をいおうとするのか？文学のいびつさ

を指摘しようとしてるのか？

いや、ぼくは、それでも文学の本質というものについての議論は成立するのでは？と問題を提起したいのだ。そういう作品は、ベストセラーになるのか、文芸雑誌にのるのか、人文社会の専門雑誌にのるのか、そういうことはちょっと別の人に解釈をまかせるとして。

記録、データベースとしての、かきことばの役割は、コンピューターとその記憶装置にまかせておけばよいだけのことで、これは本質的ではないだろう。(もちろん、コンピューターの機能には、データベース機能の他に、計算機能というものがあり、ともすると、専門家以外の間ではわすれられがちだ、ということ、コンピューターの名譽のために付け加えておきたいが。)

文学の特長は、その恒久性にあるのだろうか？

否。

文学もまた、音楽のように、その音が鳴っている間だけひびき、その場かぎりで消えていくものである。絵のように、その前をはなれば、消えてしまうものである。つまり、文学の魔法は、読んでいるときだけ発揮される。

書き言葉には、音楽や絵画など、他の表現とは異なる、そのときの「独自の時間」があるような気がする。それを一部、表現していると思われるのが、「隠喩的言語」の指摘である。ただ、よくいわれるように、隠喩的言語は、使えば使うほど、疲弊し、そのことばが「思い込み、あるいは偏見」となり、力が失われてしまう。隠喩は摩滅する。まさに、それが鳴っているときだけ響く。

「一般に、 $A=B$ に代表される、科学的言語や隠喩的言語は、直接に五感でしられる現実性とは異なる次元の現実を開示する作用をもつ。その際、科学的言語は上向きの、隠喩的言語は下向きのベクトルで作用している。」

(大虎「言語の可能性について」)

## 6 文学は表現手段のなかでマイノリティーか？

科学的言語における  $A=B$  においては、多様な現実を抽象することで、現実新しい光をあてようとする。この抽象化は、誰がいつみても、繰り返し再現可能なまで鍛えられる。一方、隠喩的言語における  $A=B$  においては、 $A \neq B$  の否定性を用い、現実の日常的な姿が揺らいで、より多様な、現実の新たな側面がうかびあがる。隠蔽されていたものの開示作用を隠喩はもっている。固定されているイメージの打破、という言い方も可能だ。

つまり、書き言葉という表現のもつの独自性は、その、現実とは別の次元を開示する作用により、「現実っていったい何？ What is real？」という問いに対する答えにむかっている。

しかし、現代では、現実を問い、知る、というようなことにはもう興味は少なくなっているのだろうか？

ひょっとすると、現実の中の非現実的なものに対する興味は、社会や日常生活からはじきとばされ、ファンタジーの世界にとじこめられてしまったのだろうか？

様々な表現手段の中で、文学作品がマイノリティーの地位を確立している現代、そんな思いがよぎる。

文学は、今や、現代社会の表現方法の中の、劣等生ともいえる。

かきことばは、交換性が乏しく、商品・貨幣交換の速度についていけない。また、その伝達するものが、「消費欲望をかきたてる」イメージをもつことが少ないどころか、そのようなイメージを壊すような作用をねらったものの中にはあるというのも低迷の理由にあげられるかもしれない。

もし、文学・詩の低迷が、単に商品・貨幣交換の世界からおちこぼれているというだけであるなら（要するに、もうからないという

ことだけであるなら)、むしろ、この劣等生にこそ期待をよせられるとぼくは考えたい。仮に、世界が単一市場へむかっている、その外部の反対勢力が消滅しつつあるとしたら、この世界に対する抵抗は、その内部の、市場原理に乗れない場所からおこってくるはずだ。これは、かつての、資本主義対共産主義とか南北問題といった、地図上で色分け可能な平面的なものではなく、すかしてみなければ同じ色にしか見えないといった、立体的な対立構造をとると思われる。そのとき、科学的あるいは隠喩的言語といった、かきことばの、現実の別の次元を(あるいは隠蔽されていたものを)開示する作用は、その威力を発揮すると期待する。

## 7 呪いをかける魔法と呪いをとく魔法

文学の魔法＝書き言葉の力、について別の説明をするために、今度は「現代社会がわかりにくいのは、そこに生きる人々が、みな、ある呪いをかけられているから」という比喩をこころみしてみよう。

その呪いを解く魔法は、呪いをかける魔法より、ずっと複雑でむずかしく時間がかかるというのは常のことだ。とくに、呪いをかける魔法と同時に、呪いを解く魔法のカギが思い出せなくなるような魔法までかかっているときには。

一般に、呪いを解くことは、呪いをかけることに比べて、時間がかかり、成功が困難だ。ひとりひとりの心の中にある、コンプレックスを解くことがなかなかできないように・・・。

文学の魔法は、どちらかといえば呪いを解く魔法といえる。

もう、言語の限界でなく、限界の言語について語ることは、時代錯誤かもしれないが、強いて言えば、のろいを解く魔法は限界の言語だ。

そして、のろいを解く魔法の難しさは、言語のもつ非生産性という弱さを思い出させる。

「言語は社会的弱者である、といったらこれに異論のある人は多いと思います。暴力的、専制的な文脈で言語がつかわれたり、法律とか規律のように絶対的なものとして我々の前に立ちはだかったり、他人の欲望を煽動し利用してだまそうとしたりするとき、言語はある力をもって現れます。それにもかかわらず、僕は言語は弱者であるという比喻を使おうと思います。それは、言語は本質的に非生産的なものであるという意味で使ってます。つまり、『百の激励の言葉よりも一個のパンを』ということです。

力として現れる言語も、その背景にある権力から分離して考えれば、単に情報の伝達と交換の手段にすぎません。我々はその言葉をおそれるのではなく、その言葉を発する者をおそれるのです。『遺憾に思う』のが大臣であるか僕であるかは重大な違いです。『言語とは、単に空気の振動にすぎない』という洒落も一理あるわけです。

あるいは、現代は情報化社会といいますが、情報化社会というときの『情報』は、ある社会的あるいは経済的な尺度によって測られた情報をいいます。家庭内や隣組の情報をいくら握っていても、役にたつことは限られてますし、逆にどんな極秘情報も、公園を散歩するお年寄りには意味不明の記号にしかすぎません。

言語は、確かに力に仕え利用されます。だが、言語そのものには力はない。

また、けっして言語は現実に先行しません。必ず、現実に一步遅れるのです。工場や畑での生産、あるいは科学的発見がおこなわれたあとはじめて、それを交換、伝達する手段として言語は現れます。CMや演説の時にも、まずあるイメージや概念があって、それを表現するのです。この言語の非生産性という弱さは、言語を扱う仕事の現場にいる人は時々実感していることだと思います。

ただし、この言語の非生産性ということは、言語の中立性を意味

するものです。これが、権力に従属すると同時に権力に抵抗するものであるという、言語の二重性の原因ですが、このことについては後でもう一度問題にします。」

(大虎「言語の可能性について」)

現代社会では、昔ながらの魔法使いの力はずいぶん弱まっている。情報をもつ魔法使いこそが力をもつ。データベース、組織力。この分野でも、ひとりの天才の時代はさったようだ。「ハウルの動く城」の中で、荒地の魔法使いが、いとも簡単に、王宮の魔法使いペンステモンにまけてしまうように。

われわれは、もはや、 $A = B$  について語るのではなく、 $A$  から  $B$  への対応についてかたる。概念についてかたるのではなく、データベースについてかたる。

現代、魔法の呪文に一番似たものは、コンピューターのコマンドかもしれない。日本語なのに、ほとんど意味内容がわからないコンピューター関係の専門雑誌や本も魔法の教科書に似たところがある。魔法によって、大地に命令を与えるように、プログラム言語は、機械に命令をつたえるのだ。

「呪文には注意深く目をとおすこと。全体の形式からけっこうわかることがあるからね。たとえば、ただ書いてあるとおりにすればいいのか、まず謎をとくのか。あるいは、ただ唱えるやつか、身振りをしながら唱えるか、なんてことだ。それがわかったら、繰り返し読みながら、書いてあるとおりでいい部分と、謎々になっている部分とをみきわめる。」

(DWJ「魔法使いハウルと火の悪魔」)

コンピューターを扱うとき、われわれはすべてのシステムを必ずしも知っているわけでないし、知らないなくてもシステムはちゃん

と動く。意味がわからなくても、コマンドをうてば実行される命令。・・・コンピューターの世界は、魔法語の世界より、むしろ現代社会に近いのだ。

門外漢に近い、コンピューターのコマンドをわざわざもちださなくても、たとえば、現代社会では、各人が、やめることのできない煙草をすっているようなものだ、いう比喻はどうだろうか？

何回かの禁煙のときに感じる、あの解放感。煙草を吸う場所や時間をさがしたり、なくなった煙草を売ってる店をさがしたりする必要のない生活。しかし、なぜか、煙草がないと、ひとごみをはなれたところにせつかくいっても、煙草をどうやって手にいれたらいいかが気になって、せつかく手にいれた孤独を味わえない。そして、また煙草を吸いはじめる。そのときの感覚は、みずからすすんで、手をのぼし手錠をかけてもらう感覚に似ている。そこに安心と快感がないわけではない。人は、どうやら、みなが語るより、すすんで「自由」より「不自由」を選ぶことが多いような気がする。

そういえば、以前、煙草を吸い続けないと死んでしまう時間泥棒の話があったっけ。

## 8 文学のファンタジー

魔法ブームである。

なんと多くの本！そして映画！

昔からホビットを愛し、自分でも魔法使いが主人公のストーリーをかいたこともあるぼくとしては、今まで日の目をみたことなかったこの世界が公のものとなり嬉しいかぎりだ（でも今度映画になる、ナルニア国物語はあまり好きではない）。

ハリポッター第6巻が、全米で発売24時間のうりあげが、690万部で新記録樹立ということだ。日本でいえば、ポケットモンスターシリーズ、少しマイナーでいえば、（魔法使いに相当するのが日本

では忍者ということだ) NARUTOというところか。イギリスではアニメが発達してなく、児童文学人口が多い。その中で生まれたのが、ハリーポッターだ。とすれば、(かわりに?) アニメが発達している日本で、こう考えるのはあながち間違いではあるまい。

そうそう、文学は、日本ではここまでがんばらなくていいんだよ。アニメにまかせておけばいい。

かといって、アニメをばかにしているわけではない。

ぼくがわすれられないのは、40歳で大腸癌で亡くなっていたある男性が、病床で、常にNARUTOのコミックの単行本を読んでいたということだ。彼はいわゆる、おたくではない。子供が、よく読んでいたのを、入院が長くなって暇なので、読みはじめたらはまってしまった、といていた。25歳で胃癌でなくなった男の子も、毎週、少年コミック誌を楽しみにしていた。ぼくだって、そんな、死とむきあうような、厳しい経験はしたことがないが、毎週のコミック誌がいきがい・救いだった時期がある。日本のコミックやアニメは、病と闘うときに勇気を与えてくれるくらい、実際に力をもっているのだ。

では、日本の文学は？

皮肉なことばはいろいろでてくる。平和で、自分にかまけているひとたちが、自分をさらに肥大化させるために、文学を読むのだ、とか。

こんな、否定的な見方はたぶん少ししかあたってない。

なぐさめの言葉をいえばこうなる。文学は、常に少数派の立場にたっている。多数派からおちこぼれた感覚に訴える。すべての人に訴える必要はなく、限られた少数の人にとどけばよい。人の魂が、数の多少にかかわらず貴重であるよう、読者の多少は作品の価値とは関係ない。ひとりでも、その作品で誰かを救えたら・・・その作品はベストセラーにならなくても価値がある。もちろん、作者個人以外の他人を救えるような作品を書くことは、実際、至難の業では



あるが。

音楽や絵画や映画で救われたような気持ちになるように、文学作品によって救われる人が、たった一人でもいれば、その作品は成功だと思う。

それが、偶然の、その場かぎりのものであってもその価値は下がるはずがない。

その出会いが、その人にとって決定的であることが実際あるのだ。ぼくが、かつて経験したように。

だから、君に届くような文学作品は、きっとある。

もちろん、この魔法だって、万能ではないだろう。少なくとも、欲しいものを手にいれる手段としては、貨幣におとるかもしれない（ハウルもお金は支払ったり、もらったりしている）。

ここでの魔法とは、人に、幻想、夢の世界をみせること、と要約できるかもしれない。魔法をかけた相手に、現実とちがう世界をみせることができる。だけど、おそらく現実はまったくかわってない。魔法がおわれれば、またもとおり。

これは例えば、イラク戦争で使用される、すべての弾丸やミサイルを、発射されると方向転換して、発射した箇所へ命中させるような魔法をかけたとしても、魔法がとけたあとは、結局、亡くなっている人の数はイラク側のほうが多い、ということだ。

親子、兄弟といった役割。上司や部下といった社会的関係。友情。とおりにすぎりの見知らぬ人。信仰を介した関係。いつもちかくにいるのに遠くかんじる人や、はじめてあったものの近くにかんじる人。

このような、様々な自己と他者の関係において、なかなか規定しにくい(表現しにくい)部分を、魔法ということばで、代用できないこともないような気がする。

ここにおける、自分と他人については、単純な考えが出发点になっている。他人は、わからない。だからこそ、それだけでいとしい。

未知のファンタジーと似ているじゃないか、とファンタジー好きのぼくは思う。それが、暴力をふるったり、自分の仕事や生活を実際におびやかしてこない限りは。ファンタジーでは、そういうことは絶対ないのだが、他人ではそうはいかない（これがファンタジー好きの理由のかなり大きな部分をしめてるだろうが）。しかし共通のものはある。

## 9 もうひとつの魔法：回想

最近、「14歳からの哲学」（池田晶子）という興味ぶかい本を読みながら、哲学は14歳までにしたい、と思った。

たしかに、14歳ごろから、現実がひろがりはじめ、社会や他人とうまくやっていく（注、適応することではない！）際に、なんらかの、思考と関わるいろいろな戦略（みばえや、演技、修辞学、権謀術などもふくむ！）をみがいていかなければならないことは確かだ。

「考えることが全世界をはかる正しい定規」というよりは、その人がどう考えているかを知ることがその人をはかる正しい定規だと思う。

「言葉こそ現実をつくっている」といわれても、どうしても現実が言葉をつくってるとしか思えないし、言葉自体が現実のひとつだ。ただ、現実に対する姿勢としては、しょせん現実！とから元気でもいえるようになりたい、と思っはいるが。

「自分とは何かわからないと感じ、どこまでも考えてゆく」ような、おそろしいことはできないし、「心の悩みを、悩んでいる心はなにかと考えることで解消する」こともできそうにない。

自分の死のことはわからないし知る必要がどれだけあるかわからないが、それにも増して、他人の死については知りうるし、知る必要があると思う。病気になると、「体は自分のおもうようにならない」と気づくのでなく、心が、病気の体を認めることができず、体に耐えられない、やっかいな存在であることに気づく。

ぼくは血のつながっていない家族の話が好きだし、社会は会社で、世間はマニュアルで、世の中とは男女の仲、規則は過保護だ、と単純に考え、「動物としてのセックスがあるぶんだけ恋愛がためされている」といえるほどセックスは嫌いではない。

気がつくと、1行1行の文章に揚げ足ばかりとっているなさけない自分がいた。結局、ぼくの発想は「教科書」からずいぶん遠くなってしまい、ここでもまたおちこぼれたのか、と寂しくなる。かといって、自分の考え方が、けっして、現実の対応能力としてすぐれているわけでないことはよく知っている。人より成功しているわけではないし、人より悩みが少ないわけではない。それでも、それは、他人では、通用しなくてもぼくのハウルの城を維持するには必要な装置だ。そんなものは壊してしまえ、などと意地悪なことはどうかいわないでほしい。

そして、おちこんだぼくは、得意の、現実逃避と退行をはじめ、ハウルの城の物語の世界にひたりはじめるのだ。

すべての基本的なしくみは、14歳までに無意識のうちにわかっていたような気がする。

その後は意識化される作業あるいは、ハウルの城を維持する作業の積み重ねだった気がする。

城に住んでみなければ、城のこわさや居心地のよさはわからない。動いてみなければ、危険や感動はわからない。

意識化する？ 解釈する？ 評論する？

かつて、ぼく自身、これらの言葉に、非常に敵対し、嫌悪感をもっていた、またはもとうとしていたことがあった。評論を筆頭とする、解釈することの不毛さ、いいかげんさ、無責任さ、を悪しとしていた。

時がながれ、今や、こうやって、評論をかこうとしている自分には、少し、解釈をするということへのやさしさがうまれていることを、告白する。

キリスト教に、「悔い改める」という言葉がある。

日本にはなじみのない発想であり、キリスト教特異のもので、日本人には役に立たない発想なのであろうか？たとえば、キリスト教徒にしても、死ぬ間際に、人は、自分のいままでの人生をまったく否定するような形で悔い改めることができるのだろうか？

思うに、悔い改めるということは、過去の自分の人生を振り返り、それに対し解釈をし自分で自分の評論をすることなのではないかと思う。その評論は、後悔であったり称賛であったり、なんでもよい。ルールはない。

ただ、この過去の自分に対し解釈をほどこすという行為自体が、人にとってなんらかの慰め、癒しになるのではないか？

もし、そういうことなら、「悔い改める」ということは、日本でも通用する。

一般に、解釈や評論は、非生産的な行為と思われる。とくに、若い人が、単に解釈や評論にとどまって前に進まないというのはあまりほめられたものではないだろう。彼らなら、むしろ、行動すべきだ。解釈や評論でなく、対象を解析し作戦を考えるべきだ。頭の中だけで、自分を変えるのでなく、頭がのった自分そのものを変えていくべきだ。

しかし、年をとっていくと（極端な、高齢者、あるいは癌の末期患者を考えてみればわかりやすいかもしれない）その時間はないし、その必要もない。逆に彼らがいくらそうしようとしても不可能なのだ。

過去の人生に対してどう考えるか？いいことをみるか、悪かったことやできなかったことばかりみて後悔するか？実はその内容だけでなく、過去の人生をゆっくりふりかえるという行為そのものが、癒しとなるのではないか？

評論が、（作者自身にとってだけでなく）その読者にとって、それを読むことがそのような回想のきっかけになればよい。癒しの評論

というものがあってもいい。

## 10 エピローグ

「間接性は、あやしい、でも、直接性も、間接性と同じくらいあやしい。」

といたら、多くの反論が殺到するだろうか？

言葉をかえてみれば、どうか？

「直接性には力がある、そして、間接性も直接性と同じくらい力がある。」

文学は、五感で感じられる現実、あるいは、社会一般的に信じられてること、あるいは、あなたが現在そう信じていること、とは違う平面が存在することを示すことができるという点について、他の表現方法より、高い潜在能力をもつと考えられる。

ここが、絵画や、音楽や、芝居や、アニメや、漫画や、映画などに、「まけない文学」をつくる要諦であろう。

たとえ、勝つことはできないにしろ……。

「僕は学ばねばならぬ。

爆弾のように、はなばなしく爆発して消えていく言葉ではなく、さびが金属をむしばむようぬ、じわじわ侵食していく爆弾の製造方法を……。」

(大虎「テロリスト」)

了